

岡山医療チーム「AMDA」 ウクライナを支援

私たちが平和な社会で安穏と生きている今、世界では戦争に苦しめられている人々がいる。現在、ウクライナでは、人々が計り知れないほどの不安や恐怖に陥っている。5月11日に、ウクライナの支援にあたっている岡山の医療チーム「AMDA」（岡山市北区伊福町）に、その現状を伺った。「AMDA」の調整員 難波妙さんは、「状況を俯瞰できる賢さをもってほしい」と訴えた。



▲「AMDA」調整員難波妙さん

「AMDA」は、実際にハンガリーのベレグスラーニー・ザホニー・キシュバルダに滞在し、避難者を支援した。現場には、医師5人・看護師2人・調整員2人の計9人で訪れた（取材当時）。

各国から支援チームが訪れており、国を超えてシフトを組んで活動していた。毎日1000人を超える避難者が訪れた。

現地では、救援物資を、刻々と変わる情報を確認しながら、安全な場所に運んでいる。生活支援物資の多くは、多くの地元の人たちが持ち寄ってくる。「AMDA」によると、取材当時は、食糧が不足していたようだ。また、病院に行けないため、病状にあった薬を提供するための処方薬がないことも課題だった。

一人一人に 寄り添い

避難者には、命からがら逃げてくる人もいれば、何が起きているのか理解できない小さな子どもたちもいた。チームのメンバーは、避難者が安全で安心できる場所を提供することに重視して、支援にあたる。気持ちの整理がつかず心を閉ざしてしまっている人には足湯をし、ゆっくりできる場所を提供する。一人一人に寄り添い、それぞれが漏らす言葉を一つ一つ丁寧に聞き、受け止めた。「心の余白を一緒に作っていく。つらいことを思い出させないため、現場の状況を聞くことはない」と、「AMDA」で調整員をする難波妙さんは語る。

「AMDA」の一員で、岡山南高の卒業生青木淳裕さんは、在校生に向けて、「戦争はやむことはない。平和がどれほど素晴らしいものか分かってほしい」とメッセージを送る。また、難波さんは、「状況をしっかりと把握できる賢さを持ってほしい。起きていることは他人ごとではないことを知り、逃げることなく真正面から向き合っていくことが大切。小さな子どもが戦争という大きな敵と戦っていることを忘れず、今ある生活や環境に感謝してほしい」と、訴えた。



▲「AMDA」のハンガリーでの拠点（新聞部作成）

高校生には「賢さ」期待